

書評

神庭重信 編

私の臨床精神医学

九大精神科講演録

山下 格

本書の「私」は、稲永和豊、前田重治、西園昌久、神田橋條治、村田豊久、内村英幸、三山吉夫、山上敏子、牛島定信、田代信維、前田久雄、森山成株(帯木蓬生)、神庭重信、池田数好の諸先生である。みな誰もが知る、わが国の精神医学界を代表する方々である。

講演内容に一言ずつふれると、精神薬理と創薬、精神分析と芸能に通ずるもの、精神分析と精神医学教育、双極性障害と発達障害の直観的な診断と治療、子どものうつ病と症状評価スケール、森田療法の基本と適用拡大、高齢者のうつ病と認知症、摂食障害の行動療法実践例、社会の構造変遷とパーソナリティ障害、マズロー理論と精神病理、統合失調症者の表情認知と脳内反応、精神科医と作家・良い文章の書き方、ストレスと情動の神経生理と免疫機能、森田療法の特徴と発展、と言えようか。

本書にはユニークな点が2つある。ひとつは、上記のように当代屈指の専門家が自分の好みの分野の講演をして、それが自然に最近の精神医学の諸課題を網羅していること、いまひとつは、演者と聴衆がみな九州大学精神科の同門の集まりであることである。そこには通常の学会講演と違って、同じ教室で暮らした先輩と同士と後輩が懐かしい医局に集まって、学問の話を、ためらいなく質問し、語り合うという雰囲気がある。

この雰囲気が、各講演を、高度に学問的であ

りながら、質疑応答も含めて個性的な面白さ、遠慮拔きの親しさ、楽しさを覚えさせるものに行っていると感ずる。

私事にわたって恐縮であるが、読書中に感ずるところがあるとページの端を折り返す癖があって、本書はたちまち本の上下端が厚く盛り上がった。それは、読むうちに肅然となった、ウーンなるほどと思った、うまいこと言うなあと感服した、ちょっと血が騒いだ、勉強になってうれしかったなど、さまざまな思いに駆られたからである。同じテーマでも学会の特別講演、あるいは分担執筆の本なら、なかなかそのようにはならない。

本書の「序」と「あとがき」には、九大精神科の裏話を含む歴史が記されている。神庭重信教授の在職10周年を記念して刊行されたが、「まえがき」には、ご自身が『着任してすぐ包み込まれたものは、九大精神科のもつエートスであった。それは、臨床と研究への情熱であり、……それらすべてを包み込む自由であった』と書かれている。本書には自由がはぐくんだ“西南学派”の人々の研究への情熱が感じ取られる。内容豊富で読みやすく有益で楽しい本であることを実感して、ひろく推薦する次第である。

(北海道大学名誉教授、平松記念病院非常勤)

●A5 372頁 2014 定価：本体3,500円＋税
創元社